

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

プロローグ

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



近年、酪農家戸数の減少が全国的な課題となっています。愛知県では、2014年度から酪農家、団体、行政などが一体となり、視察研修や学識経験者との意見交換などを行ない、具体的な対策について検討を続けてきました。その結果として2019年、愛知県独自の新規就農システム「兼業農家制」を生み出しました。今回、それが生まれるに至った経緯についてご説明します。

きっかけ

都市近郊酪農が主流の愛知県では、規模拡大や新規就農を進めていくうえで、資金面だけでなく糞尿処理や臭気対策、施設用地不足など、さまざまな課題にぶつかります。このため全国第7位の生乳生産量がありながら、酪農家戸数の減少率は全国平均より高く、県内の関係者には危機感が強くありましたが、なかなか具体的な対策を講じられない状態が続いていました。

そのようななか、ある酪農家の言葉から事態が動きました。

「俺は今までしゃにむに頭数を増やすことを考えて突っ走ってきた。大きくして何か遠大な目標があった訳でもない。しかし、あることをきっかけに、牧場って自分だけのものではないと気がついた。従業員や業者など地域皆のものなのだと。そのときから地域の皆を幸せにするために大きくしようと思った。少子高齢化が進み、酪農でも人材不足になることが目に見えている。若者の集まらない産業は衰退する。なんとか新規就農の仕組みを作りたい」

これを聞いた県の酪農農業協同組合職員は感銘を受け、すぐにほかの酪農家や行政などに声をかけて、新規就農のシステム作りを始めました。

空き牛舎有効活用推進協議会の設立

最初に行なったことは、国の畜産クラスター事業を活用した新たな組織の立ち上げでした。それが「空き牛舎有効活用推進協議会」です。酪農に興味がある人への新規就農誘導と、空き牛舎を活用して酪農経営を円滑に始めることができる体制作りに向けた畜産クラスター計画を作成し、2015年度高収益型畜産体制構築事業のうちの実証支援事業に参画しました。協議会設立当初の主な活動内容は下記のとおりです。

(1) 視察研修

- ① 浜中町農業協同組合（北海道厚岸群浜中町）
- ② 南信酪農農業協同組合（長野県松本市）

(2) 学識経験者との意見交換

- ① 東京農業大学
- ② 東京大学

(3) 愛知県の酪農PRと新規就農募集

- ① 農業人フェア出展
- ② 大学での出前講座

最初に考えた新規就農システム

空き牛舎有効活用推進協議会の活動をとおして新規就農システムについて検討を重ねた結果、まず考えたのは次のような仕組みでした。

- ① 新規就農希望者には、酪農に係る技術や知識を習得し、さらには地域環境に慣れる必要などがあるため、まずは県内の酪農家で5年程度研修をしてもらう。単なる研修ではなく、給与も支払うなど一従業員として経営に参画してもらう。研修を受け入れてくれる酪農家（親農場）は県内から広く募集し、酪農農業協同組合が「認証牧場」として認める。
- ② 地価が高く民家も多い愛知県では、新規就農者が新たな土地に新たに牛舎を建設することは困難。このため、廃業等で空いた牛舎を「親農場」が探して、それを新規就農希望者に紹介する。
- ③ 親農場と研修生の契約形態、空き牛舎物件取得のノウハウなどは、行政等が支援する。

しかし、いざこれを実行しようとしたとき、親農場となる酪農家からさらなる現実的な意見が出ました。「5年程度研修した優良な人材が経営から抜けるのは大きな戦力ダウンになる」「いくら空き牛舎を活用するとはいえ酪農の初期投資（借金）の大きさや、一人でやる場合の労力負担を考えると多くの新規就農者を生み出すのは難しい」「もっと新規就農のハードルをさげることはできないか」……。

そこから親農場と新規就農希望者がwin-winになる仕組みをさらに検討することになりました。

兼業農家制の誕生

結論から言えば、その検討の先にあったのが**兼業農家制**です。兼業農家制とは、夫婦のどちらかが親農場の従業員、どちらかが研修を経て新たに牛舎を取得する（新規就農者になる）というものです。取得後5年程度は生活環境などをふまえて将来的な経営規模を考えたり、兼業のままいくのか夫婦で独立経営とするかを考えたりする、いわば猶予



愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会のメンバー

期間になります。

この制度の新規性は、新規就農を議論するうえでありがちな、取得した農場で家族が生活できるだけを稼がないとダメという固定観念をなくしたことにあります。そして、親農場、新規就農者それぞれに、さまざまなメリットがあります。これについてはまた別の機会にご紹介しようと思いますが、まずここで伝えたいのは、この制度では新規就農に必要な体制を親農場（大規模酪農家）が自農場の発展のための一手法として位置づけることで、新規就農を容易にできるということです。そして1戸の農家を作るのではなく、親農場を中心として子農場があたかも森が成長していくように増えて、酪農が地域に広がっていくことも可能にできるのではないかと考えています。

今後の展望

2018年にこの兼業農家制を活用した新規就農第1号が愛知県で誕生しました。しかし正直この制度は、まだはっきりと先が見えないまま、そろりそろりと動き出している状況です。どこかに欠陥があってつまずくこともあるかもしれませんが、それでも、まずやれることをやっていくことが大切だと思います。酪農は一部の地域だけでやれるものではありません。もしこの取り組みがうまくいくようであれば、多くの方に参考にしていただければと考えています。

「空き牛舎有効活用推進協議会」は、この兼業農家制という「ハード」対策だけでなく、新たな人材探しという「ソフト」対策も引き続き行なっています。酪農に関心のある若い人達に酪農の楽しさ、愛知の酪農の特徴を広くPRして、実際に多くの若者に愛知県で酪農体験をしてもらっています。冒頭で紹介した、「若者の集まらない産業は衰退する」という酪農家の一言は、今も協議会活動の一つの原動力になっています。

*

以上が、愛知県の空き牛舎有効活用推進協議会が作った兼業農家制の概要です。この取り組みが少しでも皆様の参考になればと思い、次回からこれまでの活動記録をご紹介します。できるだけ気楽に読んでいただければという思いから、ちょっとした小説風にしてみましたので、よろしければご一読いただければ幸いです。📖

《つづく》



農業人フェア出展時の様子

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第1章 良い人材を愛知へ

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



ここは愛知県——都市近郊酪農が主流のこの地には、新規就農を生み出すための課題が山積していた。これはその壁に立ち向かった、酪農家と関係者達の物語である。

第1話 人材の取り合いになるぞ！

エル氏は愛知県と静岡県で乳肉複合経営を行なう大規模農家である。そのエル氏から突然のお呼び出しを受けた酪農組合職員のヨシ氏。ヨシ氏は、なぜ呼び出されたのかわからないため怪訝な顔を浮かべる。

エル氏「これからの世の中、少子高齢化で、うちみたいな雇用経営の農家は人材不足になることが目に見えている。若者が入ってこない産業に未来はない。だから他県に先駆けて優秀な若者が愛知県に集まるようにしたい。若者の集まらない産業は間違いなく衰退する。施設は金さえあれば作れる。愛知県で規模拡大が止まったように見えるのは、人が集まらないからだ。増築しても、それを運営する人がいなければならない。それどころか既存の施設でさえ、“〇〇が辞めた。また募集しなきゃ”とあたふたしている状況で、規模拡大しようと思えるわけがない」

エル氏と同じ問題や不安を抱える農家は多い。以前エル氏の牧場では採用募集を出すも新卒で何人も応募があり、その中から選んで採用していたときもあった。現在は応募数が少なく、酪農の仕事への向き不向きを見極める余裕がないため、長続きせず途中で辞めてしまう人が多いのが実情だ。「まずは優秀な人材が応募してくれるようにしたい」とエル氏。そのためには自動車産業の強い愛知県で、福利厚生や給料ではかなわないが、牛が好きで牧場に就職してくれたからこそ、サラリーマンにはない、やってあげられることを考える必要がある。

エル氏「そこでヨシ氏にお願いだ。一緒にこの人材を集めるという課題に取り組んでほしい」

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

ヨシ氏「何か具体策を考えているんですか？」

エル氏「愛知県で新規就農の仕組みを作りたい！人は“広い農地のない愛知県で新規就農は無理だ”と言うが、実際に新規就農をしている地域が日本にはある。それを学び、愛知県では真似ができない部分は、ほかの方法に置き換えられないかを考える」

ヨシ氏「何かを行なうときに、ボランティアや心意気だけでは長続きしません。言い出しっぺで牽引者のあなたが、途中でやめずに続けるには欲が必要です。欲望＝悪とは思っていないので、安心して欲を出してください。その欲の大きさと、どこまでついて行けばいいのかを考えますから」

エル氏「これがうまく行けば、牧場を持ちたいと言う優秀な人材を集めることができる。うちを選んで就職してくれたやつには幸せになってほしいんだ。“サラリーマンより良かった”と言ってもらえるようになりたい。それに自分が勤めている会社が立派ならそれを誇りに思えるだろう。だから俺は命ある限り日本で一番を目指す」

第2話 家業から産業へ風を起こす

愛知県酪農協の理事であるエル氏は、理事会でさまざまな数字を見る。農家戸数が〇戸減った、乳量の前年対比は〇%減……などという職員からの報告。出るのは「う～む。もっと乳価が上がって儲ければ辞めないし、後継者も継ぐのにな～」という愚痴に近い意見だけだ。このまま何もしなければ、年に10戸減るとなると10年後には100戸減ることになる。仲間が減れば業界の衰退となり、自分が生き残れば良いという問題ではない。

エル氏「息子が継がなきゃ自分の代で終わりという考え方、酪農家に生まれなければ酪農家になれないという世襲制——“酪農業＝家業”だから廃業する農家を止めることができないんだ。“酪農業＝産業”にならなければ、この廃業は止められない。また廃業してしまった場合は、ほかの農家が使用するなどして牛舎を空けないことが必要で、そこには人手の問題が出る。だから、愛知県に酪農がやりたい若者を集めることが必要なのだ。若者が愛知に集まってくる姿を全国に見せたい。空いた牛舎をほかの仲間が発展的に使う——そういう風を起こしたい」

第3話 エル氏の思い

エル氏には大雪で牛舎が潰れてしまったという忘れられない経験があった。

エル氏「静岡県の牛舎が大雪で潰れたと連絡を受け、雪でなかなか動けないなか辿り着くと、そこには建物に潰された牛、生き残った牛は雪で救出できず・搾乳できずで全頭乳房炎。従業員が全員無事だったことが何よりの救いだったが、まさに地獄を見た。もう牧場はやめようと思った。すると場長・副場長が、『社長、頑張りましょう！再建しましょう！』と言う。飼料会社・獣医など債権のある業者も『代金は待つから再建してほしい』と言う。愛知県の従業員は『こっちは僕達で何とか頑張りますから牛舎再建に専念してください』と言う。俺は大泣きした。今までしゃにむに頭数を増やすことを考えて突っ走ってきた。何か遠大な目標があったわけでもなく、ただ人より大きくなりたいという欲望だけだった。しかし皆の言葉を聞いて、“牧場は自分だけのものではない”と気がついたんだ。従業員・業者など、関わってくれる皆のものなのだと。そのときから俺は、牧場に関わる皆を幸せにするために大きくしようと思ったんだ。大きくする意味ができた。すまん、思

い出して涙が出てしまった」

ヨシ氏「なるほど、そういうことだったんですね。県外で何もお手伝いできず申し訳ないと思った覚えがあります。わかりました。その壮大な構想のお手伝いをさせていただきます。ただし、私は一農家のためだけには動けませんから、社長の欲望を愛知県のために利用させていただきます」

エル氏「愛知県に若者が集まる。それがやがて愛知県の酪農を支えていくんだ。できないと思っているからできない。できるところを見せればおのずとついてくる！」

第4話 周りを巻き込む

その話の後、2人はすぐに理事のヒデ氏（当時酪農委員長）のもとへ話しに行った。また県庁酪農担当と予算取りの相談をし、畜産クラスターのソフト事業を活用することとして手続きを開始した。

愛知県酪農協全体では、この取り組みに半信半疑であったため、理事会などでは「新規就農を愛知県酪農協の廃業農家対策の施策にしようと言っているわけではない。一つの試みとして視察研究させてください。そのために協議会を立ち上げます」と説明し、なんとか了解を得られた。

そして具体的な視察先はどこがいいか、また視察内容をどのようにまとめるか、それについて助言してくれる有識者はいないか、などを関係者で固めた。できあがったクラスター計画は国の人の関心も高く、「空き牛舎有効活用推進協議会」は、まずまずのスタートを切った。

《つづく》

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語



第2章 霧の国から ～1年目の手紙～

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会

序文

これは、空き牛舎有効活用推進協議会による初めての視察研修を物語にしたものです。

一般的に酪農と聞くと北海道をイメージする人が多いですが、例えば愛知の酪農と北海道の酪農を比べると、いろいろな違いがあります。自給飼料生産に対する考え方や、生乳の販売方法、さらには経営者やその家族が日常生活に求めるものなどなど。考えてみれば日本は広く、また人にはそれぞれ個性があるので違いがあるのはあたり前で、何が一番良いということはありませんが、少なくとも、その地域の酪農の良さや特徴を広くPRしていくことは、酪農振興の観点からとても大切です。

一方で、他地域、他者との情報交換などをおして、良いところを取り入れていくことも必要でしょう。酪農を愛する人同士、皆が同じ時間を共有し、そして新たな時間を一緒に積み上げていくことができるはずです。そんな思いから、この物語が生まれました。(舞台：北海道厚岸郡浜中町)

霧の国から～1年目の手紙～

マルさん、1年前の霧多布の夜の町のこと、覚えていますか。

今までに見たことがないほどの濃い霧は、その日の夕方に町はずれで見た灰色の海から沸き起こり、海がそのまま足下まで続いているという錯覚に襲われるほど、広く深く町を浸していました。街灯の光は霧と同化してその姿を失い、点在するネオンの色彩はあたたかも乳白色の和紙に滲んだ染料の如く淡く霞んで見えました。そんな世界に、あなたの酔顔の朱さだけが確かな存在をもって霧中に浮かんでいたのです。

場末のスナックで、地元の青年から氷下魚^{こま}を勧められたあなたは、かつて北海道に居を構えていたある種の誇りから、私を含めて内地しか知らない旅の同行者達に、北の海が産

登場人物

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。



み出す美味を大仰に喧伝しているように見えました。しかし同じ北海道といっても、そこはマルさんの生活していた札幌とはあまりにも離れています。実は初めて味わう氷下魚の味が、道東の東端という未知の領域にいるあなたの高揚感をさらに高めて、時間を経るごとにお酒の量を増やしていったのではないのでしょうか。

町の通りには私達5人のほかに誰もいませんでした。耳を澄ましても車の走る音などの雑音はまったく聞こえず、どこまでも静かでした。しかしあのスナックのネオンは、前日もそして翌日も消えることはなかったのです。主産業が酪農と漁業の遠い北の町で、人の息遣いは確かに続いていました。改めて思い起こしてみる旅の記憶は、何か大事なことを私に気づかせてくれた気がします。

そもそもあの旅に私が同行したのは、あなたの同志であるヨシさんからの一通の手紙でした。「エルさんとヒデさんの力になってほしい」。言うまでもなく、二人は私がお世話になっている方達です。私なんぞが何の役に立てるのかわかりませんでした。七月の始めに5人で遠い北の大地へ旅立つこととしました。

女満別に降り立ったとき、予想外の暑さに驚きました。後から聞いた話ですが、ちょうどその頃は例年にない高温が続いている状態でした。私達の旅にはその始まりから、普通ではない何か特別なものが用意されていたのでしょうか。

車を借りた私達は大地へと滑り出しました。初日の予定は移動のみであったため、最後列に一人座ったあなたは、遠慮がちに麦酒の缶を傾けていました。どこまでも続くまっすぐな道と見渡す限りの緑の大地、そして青く澄んだ空から降り注ぐ陽の光。そんな風景の中で味わう麦酒の味はどうだったのでしょうか。運転するヨシさんの交代要員として、助手席に座っていた私には想像ですらわかりません。

一年経ってこんなことを問いかけるのは、決して羨みの気持ちからではありません。今思うとあのときのマルさんの顔色は、夜霧の中で見た朱さとは違っていたのです。そのことが、あの明るく広い世界は、時間と空間が交差する刹那の無限の積み重なりで構成されており、高速で大地を走り抜けているつもりの私達は、実はその一刹那の捉われ人に過ぎなかったことを教えてくれて

いた。そう思えてならないのです。マルさんの身体に吸収されたはずの麦酒は、実は缶の中に留まったままだったのではないかと。ひょっとしたら今でもあの道の真ん中に……。

別海から浜中へ入り、海が近づいてくる頃には陽が傾き始め、それと時を同じくして空には雲が広がってきました。周囲の風景も少しずつ変わり始めました。道路の両脇に灌木や雑木林が目につくようになり、その合間には朽ちたような小屋も見られました。車内の5人の口数が減ってきたのは、単に長時間のドライブに疲れてきたためだけでなく、どこか神々しくも心寂しい景色の中で、皆が郷愁の念にかられていたか



らではないでしょうか。

神々しいという言葉を用いましたが、この気持ちは、道が下りながら緩やかな曲線を描き始めたかと思うと、突如その先に広がった浜中の海を目にしたとき、より確かなものとなりました。灰色の海の上に黒々と長く横たわる巨大な台形の土塊。これが霧多布岬であることを後から知るのですが、そのときは見たこともない光景に皆が驚きました。厚い雲のわずかな切れ間から薄く細い何条かの陽の光が差し込み、まるで神々が住まう地を照らし出しているかのようでした。その日の夜、マルさんが霧多布の霧の魔力に引きずり込まれたのは、やはり必然だったのでしょうか。

翌日は本来の業務で一日を費やしました。その日も日中は眩しいほどの晴天に恵まれました。午前中は全国的にも名の知れた地元農協の組合長との座談会。午後は視察で新規就農の牧場などを訪れ、我々の仕事に関わる多くの方との交流がありました。一方で浜中を走り回っていたときに「ここは雄大で美しいが逆に広すぎて慣れない自分にはなかなか落ち着く場所が見つからない」ということを、エルさんが口にしました。マルさんはどうだったのでしょうか。感じ方はそれぞれあったと思いますが、視察の最後に訪れた牧場で、われわれの地元出身の若者が新規就農し、その浜中の地で仕事と遊びを謳歌している姿に出会ったとき、5人は一様に不思議な安堵感に包まれていました。恐らく心の奥底では皆同じ思いだったのでしょうか。

私は思い出しました。とある場所で遠くに鹿の親子を見つけた私が思わず声を上げたとき、視察案内を担当した農協職員の方が、「われわれにとっては珍しくもなんともないです」と言ったこと。新たな環境に人は順応できるし、また新たな環境に人は飲み込まれていくのです。

そう考えると、今でも私の脳裏に残されている、北海道を離れる直前に紺碧の摩周湖を見たときのエルさんの破顔も、山ほど購入した六花亭やロイズなどの北海道土産を選んでいるときのヒデさんの真顔も、長距離運転で三日間ハンドルを握り続けたヨシさんの真剣な横顔も、そしてマルさんのあの夜の朱顔も、皆同じだったのです。それは単にいかつさ(……)が共通していただけでなく、すべてはあの旅がわれわれに与えた歓喜と不安の混沌の表れでした。あのとき私が見知らぬ地で非日常を享受していたという思いは誤りで、実はわれわれ5人も、農協の関係者も、若い酪農家の方々も、町のスナックのママも、皆同じ日常の中で同じ時を過ごしていたのです。

マルさん、霧多布の岬の先の灯台のこと、覚えていますか。

2日目の夕方そこに訪れたとき、息ができないほどの強風が吹き荒れ、昼間の暑さが嘘のように皆寒さに凍えていました。岬の上から周囲に広がる海を見下ろせば、初めて見るような草花が、風に吹き飛ばされまいと崖の土肌に必死に根をはっていました。岬から車で数分も走れば、あの穏やかな町の通りに戻ることができます。すべてのものを吹き飛ばすかのような厳しい大自然は、一方でその夜も、町を静かな幻想の国に変えていました。その翌日、私達は町を離れました。

あれから1年。今夜も町は霧に包まれているのでしょうか。いや、きっとそうに違いありません。☎

《つづく》

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第3章 兼業農家制の発明

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



新規就農における課題を話し合う

空き牛舎有効活用推進協議会では、新規就農の支援体制を学ぶための先進地視察や、酪農に対する学生の意識を知るための大学訪問などを行ってきた。

ヨシ氏「これまでの活動をとおして、新規就農に必要な要件は何だと思いましたか？皆さんで問題提起してください」

愛知県の新規就農システムを考えるために開催された協議会の検討会の冒頭、ヨシ氏がこう切り出したところ、まずヒデ氏とキヨ氏が、他地域と愛知県の組織体制などの違いを意見した。

ヒデ氏「われわれが視察した地域では、地域全体で新規就農者を作るんだ！という意識の高さが凄い。農業がメイン産業である地域と、自動車産業を中心とした工業が盛んな愛知県では、大きな隔たりがあることを実感した」

キヨ氏「空いた物件が出たときに農協がそれを買い取り、研修を終えた後に新規就農希望者に譲渡する仕組みがありました。が、愛知県では空き牛舎を誰が買い取ることができるのでしょうか？」

信州大学にて



これにヨシ氏が残念そうに応えた。

ヨシ氏「専門農協である愛知県酪にはそんな資金力ないし、その物件の価値判断や、買った後に就農者を見つけるノウハウも正直ない」

一方マル氏は、研修農場のシステムや人材募集の方法について触れた。

マル氏「北海道浜中町では研修農場のシステムがしっかりとしていました。実習者を受け入れる研修農場と、新規就農した

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

いという人を探す機能が必要ですね」

ヨシ氏「ほかはどうですか？ 問題になりそうなことはありませんか？」

ヨシ氏の問いかけに、ヒデ氏とエル氏が思い出したように発言した。

ヒデ氏「長野県では、ほかの地域から新規就農したある酪農家が、最初は近隣との付き合いが難しかったと言っていたね。施設は揃っていても、それまで堆肥を入れさせてくれていた農家がよそからの転入者とそのまま付き合うわけではないという実情は、畜産経営で落とし穴になりかねない。牛舎の周りを綺麗にしたり、良質な堆肥を作る努力をしたり、信頼を得るまでに3年くらいかかったと言っていた」

エル氏「そう言えば、就農して2、3年休みがなかったとも言っていた。ヘルパー制度があっても、資金繰りでヘルパーを利用する余裕がなかったとも。従業員のうちは月何日かの休みがあったのに、自分で経営を開始したら休みは自分で作らなきゃならなくなる。それって大変だよな」

その後もいろいろな意見交換を行ない、一旦検討会を終了した。

行政主導ではなく民間（農家）主導型

後日、ヨシ氏は検討会で出された問題提起に対する対応案を考えた。

- 空き牛舎については、まず酪農家が賃貸や購入により空き牛舎を入手して、新規就農者に貸し出すことはできないか。
- 新しく研修場所を作るのは愛知県では現実的ではない。酪農家の牧場を研修農場にできれば、より実際の酪農経営に即した研修ができるのではないか。
- 研修農場が既存の酪農家の牧場であれば、新規就農希望者が地域に溶け込むことも容易になるのではないか。
- 研修農場になってくれる酪農家は多くはないかもしれないが、まずは愛知県酪の組合員全員に声かけをして、手上げ方式で募集してみよう。個々の酪農家が対応するのではなく、愛知県酪が研修農場として承認するという形であれば、県全体の取り組みにできる。
- 新規就農希望者を探すために、北海道の視察のときに聞いた農業人フェアに出展してみよう。

この対応案を見たマル氏は、新規就農を生み出すために酪農家の力が大いに必要であることを感じた。

ヨシ氏「そのとおり。愛知県の新規就農システムでは行政や農協ではなく、民間主導にできないかと思ったんです」

その後ヨシ氏は、新規就農者のための研修農場（親農場）を愛知県酪が承認する「認証制度」を確立させるため、事前に組合長に説明したり、事務手続きのやり方を関係者で検討したりするなどの準備を進め、2017年3月、愛知県酪の理事会で承認を得ることに成功した。さらに、組合員に対して親農場の募集をかけたところ、まずエル氏とヒデ氏から手が挙がり、二つの牧場を認証牧場とするところまでこぎつけた。

欲から出た誠

そんなある日、ヨシ氏はエル氏から、相談があると呼び出された。

エル氏「親農場って研修期間が済んだらどうしても研修者を独立させてやらなきゃいかんのかな？ それと新規就農は酪農じゃなきゃまずいだろうか？」

ヨシ氏「なんですかそれ？ 何をいまさら！」

エル氏「正直に言おう。いざ認証牧場になって、研修生が入って来た後のことをシュミレーションしてみたんだ。5年後には中堅として自分の牧場を背負っているだろう。その人材に抜けられるかと思うと、喜んで物件を探したり、世話をしてやれんと思ったんだ。それと空き牛舎を活用するとはいえ、やはり酪農を始めるためにはそれなりの初期投資が必要だ。新規就農のハードルをもっと下げたい。例えば、肥育や和牛繁殖からスタートするというはどうだろう。県酪事業だから酪農じゃないとまずいかな」

ヨシ氏「衝撃を受けましたよ。視点を変えてみるんですね。新規就農者を育てる親農場にもっとメリットがあるならば、確かにほかに波及しやすい。親農場のボランティアや心意気だけだと行き詰まるということですね」

エル氏「そうそう。それに肥育や和牛繁殖なら、初期投資や労働力は酪農に比べて少なくてすむ。例えば奥さんがエサやりなど日々の基本作業をやって、本人が親農場の作業の合間に手伝うということもできる」

ヨシ氏「研修生が親農場を辞めなくても牧場を取得できる方法がそこにあるじゃないですか！ 新規就農っていうと、取得した農場で家族が生活できるだけの稼がないとダメという固定観念がありました。それを捨てることで新しい新規就農の方法ができますね。これってある意味『兼業農家』ですよ！」

エル氏「俺達凄い事思い付いたな。これは発明だぞ！」

その後2人は、あんなこともできる、こんなこともできると、暗くなったことも気づかず話し込んだ。後日、ヨシ氏はこの話をマル氏とキヨ氏など関係者に伝え、新規就農に関する新たな制度「兼業農家制」の仕組みを構築することとなった。

兼業農家制とは

夫婦のどちらかが親農場の従業員、どちらかが新たに牛舎を取得する。取得後5年程度は、経営規模や経営形態について、子育てなど日常生活のことも踏まえて考えていく。この期間が、兼業のままでいくか専業とするかを決める、いわば猶予期間となる。親農場と新規就農者それぞれのメリットは表のとおり。

ヨシ氏は一人考える。農協や役場に勤めながら自分の田んぼや畑などをやる兼業農家とは違い、夫婦のどちらかが牧場に勤務しながら、別に自分の牧場を持つというこのスタイルは、農地を持っていない者が牛舎を買ってゼロから畜産を始める有効な手段となり得るのではないだろうか。とはいえ、今後いろいろな問題が出てくるだろう。しかし日本全国



小笠原牧場にて。東京農大の先生&学生とミーティング

同じことをやっていれば失敗したときに影響が大きいですが、今はまだ愛知県だけでの試行段階。もしこの方法がうまくいけば、ほかの地域でもこれをアレンジしながら普及させていくことができるはず。とにもかくにも、こうして兼業農家制は産声をあげ、よちよちとその歩みを始めた。

表 親農場と新規就農者のメリット

	親農場	新規就農者
人材	研修終了後も夫婦のどちらかが従業員として残留する可能性がある。	獣医師や飼料会社などについて、親農場の人脈を活用できる。
	それぞれの農場間で作業員の応援のやりとりをすることで、それぞれの休日確保がしやすくなり事故など緊急時にも相互補完できる。	
物件取得	空き牛舎（物件）が見つかったときに新規就農希望者の独立準備ができていない場合、まず親農場が取得して別農場とすることで規模拡大し、希望者の準備が整ったときに、その物件を譲渡するなど柔軟な対応が取れる。	物件を親農場から紹介されるため信頼性が高い。
		物件が出るタイミングをあまり考えなくてよい。
		研修中に親農場が取得した別農場で仕事をすれば、作業性などを知ったうえでその物件を取得できる。
物件の所有者（元酪農家）としては、同業の酪農家への譲渡でなく、新規就農希望者を応援するという目的があるため気持的に譲渡しやすい。		
牧場経営	新規就農希望者が独立して取得した別農場を譲渡しても、「のれん分け」としてのメリット〔親農場の職場としての魅力が向上（人材が集まる）、従業員のモチベーション向上など〕を享受できる。	牧場の従業員では困難な農地取得資格を得ることで、農業の多角経営なども可能となり、ある種の安心感のうえで事業展開や日常生活を考えることができる。
	堆肥処理施設の共同利用、資材の共同購入などにより、経営コストを抑えることができる。	
	夫婦のどちらかが親農場の従業員であれば、その従業員は「親農場」と「自分の農場」について、それぞれの「経営」の良いところ、悪いところを多面的に分析でき、そのうえでそれぞれの経営にアドバイスすることができる。	
生活	「経営者」に専念でき、事業展開を考えたりする余裕ができる。	新規就農後すぐに収益がなくても、親農場で働く配偶者の給料などの収入がある。
	仲間が増え、人材育成や地域酪農振興など新たな夢を持って生活できる。	もともと親農場の近くで生活しており、その近隣での新規就農となるため生活変化の度合いが少ない。

《つづく》

※イラスト＝宮田 彩可（愛知県／清水牧場・従業員）

兼業農家のススメ

新規就農者を生み出すために動いた酪農家と関係者達の物語

第4章 ジャックに捧げる バラッド

愛知県 空き牛舎有効活用推進協議会



序文

家畜が産業動物であることは事実ですが、牛を経済行為の対象として扱うことと、牛の命を大切にすることは決して矛盾しません。優しく丁寧に搾乳すると乳量が増えるという話もあります。牛（乳用牛）は単に生乳を生産するだけではなく（それ自体すごいことですが）、牛セラピーという言葉もあるくらい、人と牛の関係には深いものがあります。

畜産に関心のある若者のなかには、生き物の命について考えている人も多いようです。畜産の世界に足を踏み入れてからそのような思いが芽生えたのか、もともと命について考えているなかで畜産の世界に興味を持ったのかはわかりませんが、「家畜の命」というものは、これから新たに酪農に関わっていく若い人達にとっても、大きな意味を持つのではないのでしょうか。

空き牛舎有効活用推進協議会事務局のヨシ氏は現在、自ら作詞作曲した歌をとおして若者などに酪農をPRする活動もしていますが、本作品はそのきっかけになった協議会の活動を物語にしたものです。主人公は当然ヨシ氏です。

（舞台：長野県信州大学伊那キャンパス、八ヶ岳中央農業実践農場）

ジャックに捧げるバラッド

唄うことは難しいことじゃない。

八ヶ岳中央農業実践大学の教室で50名を超える若者を前にして、私は自分にそう言い聞かせていた。緊張を紛らわすため、教壇で酪農の魅力について矢継ぎ早に語りながら、ふと左方に並んで座った仲間達に目をやると、5人の視線はまるで私を試しているかのように冷ややかに見えた。やはり彼らは助けてくれないのか。仕方なく話を終えると、背後に置かれたギターケースに手をのばし、中からギターを取り出すと、椅子に座りながらそれを肩にかけた。いよいよ始まるのだ。そう思ったとき、普段感じたことのないずしり

登場人物

エル氏：愛知県半田市の大規模酪農家（乳肉複合経営）。空き牛舎有効活用推進協議会誕生の立役者。「兼業農家」第1号を生み出す。

ヒデ氏：愛知県西尾市の大規模酪農家。最年長者として幅広い知識と経験から関係者間の調整を担う。

ヨシ氏：空き牛舎有効活用推進協議会事務局。かじ取り役として協議会を牽引。

マル氏：ヨシ氏の相談役として協議会運営をサポート。

キヨ氏：協議会の立ち上げに助力。その後は協議会活動を陰に陽に記録。

とした重さを肩に感じた。そしてその感覚とほぼ同時に、今朝の八ヶ岳の風景が私の脳裏に広がった。

その日の早朝、宿泊場所である八ヶ岳の酪農家が経営するロッジの水洗い場で、私は一人昨夜の宴の名残を片付けていた。まだ眠りから覚めない旅の同行者、酪農家2名と吏員^{りいん}2名そして私の知り合いの女子学生1名の5人は、私の歌手デビューの成功を祈念して、昨夜遅くまで私のグラスにお酒を注いでくれていた。しかしその一方で、ここに来るまでの車中で私の愛用のギターが邪魔だと後部座席へ追いやったり、ステージが失敗したら自分で責任をとれと言ったり、胸中は冷めていることを私は重々理解していた。



不安と不信に波立つ心を抑えて、缶やグラスに残ったお酒を屋外に備え付けられたシンクへと流し捨てていく。最後のグラスを手にとったとき、氷がすっかり溶けて透明な水となっていたその中から、ふと香ばしい匂いがした。それは昨日、伊那の谷間にある一軒の酒屋で買ったジャック・ダニエルの香りだった。

旅の初日、すなわち昨日は、伊那にある信州大学農学部で、少人数の学生を対象にした講演会を行なった。若者達に少しでも酪農のことを理解してもらおうと私は熱く語り始めたが、気づくと協力してくれるはずの吏員達の姿が見当たらない。しばらくして談笑しながら2人が遅れて講義室に入ってきた。遅れた言い訳を後で聞いてはみたが、彼らに対する私の不信はそのときから生まれていた。

その日は日が暮れるまで伊那に滞在した。昼に食した伊那名物ソースカツ丼も、新緑が美しく広がる信州大学伊那キャンパスも、山の中腹の温泉から眺める伊那谷の夕景も、すべてが同行者達の心を捉えた。しかし彼らは、今回の旅の行程を組んだのが私であることをどこまで理解してくれているのだろうか。早めの夕食を終え、宿泊地である八ヶ岳に向かおうとしたとき、酪農家達がお酒の買い出しを提案した。お酒やつまみもすでに十分手配済みであり、またも彼らの勝手な振る舞いに不信感を募らせたが、不満はもらさず、私は近くで見つけた酒屋の駐車場に車を止めた。

そこで買った一本のジャック・ダニエル。車に乗り込むと早速ボトルを開けた同行者達は、高速の渋滞に捕まっている私の苦労を思い図ることなく、思い思いに酔いを進めていった。もっともおいしい水割りの作り方を語る者、テネシーの蒸留所に行った経験を自慢げに語る者、酔いに任せて眠りにつく者……。途中諏訪湖畔に広がる美しい夜景を見つけた私は、皆にそのことを伝えたが、誰も話を聞いていない。私はハンドルを握り直すと、山間地を縫うように東へ延びる闇夜の道を走り抜けていった。



ジャック・ダニエルの香りの残るグラスを片付けたとき、宿泊部屋のある2階から階段を下りてくる足音が聞こえた。1人、2人、3人……皆ほぼ同時に目を覚ましたようだ。朝の挨拶と片付けに対する少しの^{ねざら}労いの言葉をかけながら、彼らは私の横をとおり抜けてトイレへと消えていく。それを横目にクーラーボックスを積み込もうと、ワンボックスカーのリアのドアを開けると、後ろに追いやられていたギターケースが不意に転げ落ちてきた。危うくそれを受け止めたが、持ちなれているはずのギターは驚くほど重かった。午後のステージを前に緊張が高まっているのだ。そう感じた私は、高原の空気を胸いっぱい吸い込んで落ち着こうと、宿の裏庭に出てみた。

すると、そこに広がる光景に思わず息をのんだ。昨夜は夜遅くに到着したため気づかなかったが、眼前には八ヶ岳の山々が手の届くほど近くに^{きつりつ}屹立していた。頂上付近には所々雪が残り、雲一つない晴れ渡った青空に山の端がくっきりと描き出されていた。麓から私の足元まで一面新緑の草原が広がり、何頭かの牛達がのんびりと草を食べていた。山のほうから早朝の爽やかな涼風が時折吹き寄せ、私をとおり抜けて後方へ流れていく。そのたびに草花達が、夜露を輝かせながら優しく揺れていた。

肩に食い込むギターの重さは、そのときの風景を私に思い出させてくれたのだ。緑の大地の上で、青い大空の下で、牛や草木や花たちがそれぞれの生命を謳歌していた。

そう。唄うことは難しいことじゃない。

私は何かに背中を押されるように、ギターの弦を弾いた。

「命を語ることはそれは重たすぎるね。でも今日から思い出したら命に感謝しよう」

唄いながら私は思った。同行者達はギターケースを邪魔と思っていたわけではない、そして責任逃れをしていたわけでもない。彼らはギターの重さ、それはすなわち唄うことの大切さを、私に教えてくれていたのに違いない。

「君の命は君だけのものじゃない。大切に大切に育ててほしい」

思えば5人は、それぞれの立場で私のステージを支えてくれていた。本番前の音合わせのとき歌声の聞こえが良いマイクの位置を教え



てくれたエル氏、高音の声の伸びをさだまさしのようにと評してくれたヒデ氏、私のわがままを上手にやりくりしながらステージの進行管理をしてくれているマル氏、学生達を飽きさせないため綺麗な歌詞スライドを作成してくれたキヨ氏、何より唄う姿を見てほしいという自己顕示欲から私の唄う原動力となっていたユウナ。ギターの重さは自らの緊張からきただけでなく、彼らの期待がそこに込められていたのだ。

「届け届け僕のこの思い」

私は己の勘違いを恥じながら唄い、そしてすべての曲を唄い終わった。拍手はまばらだった。しかし私の心は浄化されており、そのことだけで十分だった。いや、十分なはずだった。私は仲間達に歩み寄りお礼を伝えようと思った。

そのとき、私の唄を聞いていた学生の中から、一人の女性が近づいてくることに気づいた。

帰路、伊那谷を走る高速上から見える南アルプスの山々は、昨日と同じく澄んだ空気の中、夕陽を浴びて美しく輝いていた。昨日は緊張を伴ってそれを眺めていたが、今は違う。私の心は北岳の頂に届くかの如く、天高く舞い上がっていた。あの女子学生からもらった「感動しました」の一言、そして彼女に手渡した私のサイン入りの歌詞カード。そのことを思い出すたび、口元が緩むのを認めなかった。

運転する私に構うことなく、5人は相変わらず酒盛りを続けている。車窓に広がる美しい風景は、彼らの目には入らないに違いない。ましてや、私の心の中の歓喜に気づくはずなどないだろう。

「ジャックが空になったぞ」

誰かが言った。そうか。あのお酒はまだ残っていたのか。私は再び今朝の出来事を思い出した。しかし一人で片付けをしていたときの憂鬱さはもう残っていない。そして一度空になった心は、別の何かで満たされていた。最初それは仲間達に対する私の思いが変わったからだと考えた。しかしやはり自分に嘘はつけない。私はただ、己の成功に酔いしれていたかったのだ。

「乾杯！」

心の中で、私は一人祝杯をあげた。🍷

《つづく》